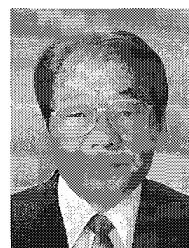


新任教員紹介



文学科（英語英米文学
専攻コース）教授

大塚 巖

今、振り返ってみますと、私の英語学の研究の萌芽は高校時代にあったように思われます。英語の勉強が面白くて、時間があれば英語の勉強にふけている生徒でした。なぜ、どうしてかと疑問が湧くと、当時の高校の英語の先生に毎日と言ってよいくらいによく質問をしました。その時の英語の先生は発音のきれいな温厚な年配の先生で、私の質問を決して嫌がらず、すべて納得のいくように答えてくれました。氷が解けるように、疑問が解消したものでした。大学の四年生の時、夏休みに帰省して先生をお訪ねした折に「大塚は、卒業論文には、英文法に関することをテーマに選んだと思うが、どうかね」という主旨のことを言われたことが思い出されます。

将来は英語の教師になりたい、というよりそれよりほ

かに自分を生かす道はないと思い、そのような思いに沿って進学する大学、学部を決めて、勉学に励んでいました。

日本の伝統的な英文法研究に大きな影響を与えたものに、アメリカ構造主義言語学と変形生成文法があります。私が学部学生の時の授業には、イエスペルセンの伝統的な英文法とフリーズのアメリカ構造主義言語学の講義がありました。修士課程と博士課程の時には、チョムスキーの提唱した変形生成文法に関する講義と演習がほとんどでした。

私自身が、アメリカ構造主義言語学の枠組みの中で文飾の表現を実地に研究したのが、*A Study of Sentence Modification*であり、変形生成文法の成果を取り入れながら研究を行ったのが、*On Adjectives in English with Special Reference to Those with To-Infinitives*と、「様々な変形規則」です。これらの研究は、理論に走りすぎないようにと、できるだけ多くの言語事象を収集しながら進めましたので、論文には実例 (attested examples) が多数収録されています。例が限定されているような場合には、網羅的に示しました。

文法とは形式と意味との間に存在する一般性、規則性を求めたものです。しかし時に、規則に合わない例外的事例が見出されることがあります。その存在に気がついて、それはなぜかと追求し、その例外的事象の中にさらに一般性を見出そうとし、その結果を、論文として公表したのが、「名詞複合修飾語の前置について」「派生名詞の受身的意味」「Declining eyesight を「視力の衰え」と訳すといの場合について」「I take it that you are not interested の it that 節について」の四編です。

音声学や音韻論にも関心がありましたので、特に Chomsky & Halle の音韻論の大部な著作 *The Sound Pattern of English* は熟読し、自分なりに検証を試みしました。その成果は、研究社の『新言語学辞典』の音韻論関係の約四十項目の執筆に取り入れました。

英語学研究というものは総じて「英語がよりよく分かるためにある」と考えます。英語学を学び、研究してきた成果は、『新言語学辞典』、『コンサイス英文法辞典』、『日・中・英言語文化事典』、『小学館 プログレッシブ英和中辞典』の執筆や、『いかにして言語学習に干渉し

ないか』と *How to Live Vividly Through Isuzen* の翻訳等に、活かされていると思います。

上述のように、私はもともと英語学を専門としていましたが、昭和五十七年度の金沢大学大学院教育学研究科修士課程の発足に際して、専門が隣接領域と考えられた私が、英語科教育を担当する教員となることを要請され、それ以後、英語学と英語科教育の二つの分野を専門とすることになりました。

時代が変化し、大学が次々と変革を求められてきた昨今、自分の専門を昔ながらに保持している研究者は少ないのではないかと思われます。私の場合、新しい分野に挑戦することによって、新たな世界が見え、また自分自身が大きくなったような感じがします。さらには、私たちのように日本にいて英語学などを研究の対象としている者が、実学的色彩を持つ英語教育というものについて真剣に考察し、一定の見解を持つことは、意義のあることであるし、また必要なことであると思っています。